
神様の庭

やがわいなほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の庭

【Nコード】

N02290

【作者名】

やがわいなほ

【あらすじ】

うちには代々伝わる、習わしがある。
生まれた長子を、カミサマに会わせること　　と言っても、実際カミサマとご対面するわけじゃなくて、カミサマがいるっつー池まで連れてくだけ。

……だったはずが、池から出てきちゃったのは　　？

うちの敷地には、カミサマが眠っているらしい。

実際目にしたことはもちろんないが、家督を継ぐ者に跡取りが出来る、そのカミサマに会わせる、という名目で、バカみたいに広い敷地のなかの、これまた広い池に子どもを連れて行くわけだ。

俺も、俺の親父も、親父の母親であるばーちゃんも、この家の長子に生まれた者は、ずっと続けてきた習わし。

実際カミサマがいるなんて思っただけではない。でも昔っから続いてきた縁起担ぎを自分の代で止めるほどの主義主張もないし、半ば以上散歩気分で池のほとりまでやって来た俺ら夫婦と生まれたばかりの可愛い可愛い娘は、辿りついたそのとき、池が割れるという異常現象を目の当たりにし、絶句した。

「も、モーゼ……?」

気持ちはわかるぞ妻よ！ あの映画のシーン思い出したよ俺も！ポカーンな顔で立ち尽くす俺たちの前で、割れた池からひとりの男が現れた。

黒い髪は長く艶やかで、顔は怖いくらいに整っている。俺には京劇風、としかわからない典雅な衣装に身を包んだ彼は、男にしておくのがもつたいたいなくらいの美しさだった。芸能人と比べたらって、比較するのも可哀想つくくらい。もちろん向こうが、

ほんともつたいたいな！ この顔で男か！

腕のなかの娘が、その男に向かって手を伸ばす。こんなに小さくてモ女は女か！ 美形が好きなのか!?

「娘よ。名はなんという?」

……なんというか、声が無駄にエロい。
ごくごく普通の言葉を発しているのに、それですらも腰を砕きそうになる美声ってなんだ。

あと、奥さん。一応まだ新婚の夫がすぐ横にいたので、あんまりあからさまに見とれたり聞きほれたりしないでいただきたい！

「娘よ」

「いや、生後一週間の赤ん坊が名前言えるかよ」

俺たちのことは清々しく無視して、可愛い娘にばかり話しかける男の、その滑稽さに思わず突っ込んでしまった。

うちの子まだ生まれたばかりだから。言葉ってというかあーうー声上げるだけで精一杯だから。

「それでは其の方が答えるが良い。この娘の名は」

「てかあんた何様だ　いや、想像はついているんだが、信じたくないってというか、それを口に出したら俺が非常に痛々しいというか」

何を当たり前のことを。そんな顔で、男がひとつ瞬きをした。

黒々とした眼が、娘から視線を移してこちらを見やる。

「　　我は北方を統べるもの。其の方らは我を祀る一族であるのに、知らぬのか？」

……………アイタタタ。何が痛いって、この現実を否定できない現状が痛い。

大体池にカミサマがいるだなんて、お伽噺じゃあるまいし、信じてたわけがないじゃないか。

今までだって何代も続いてきた我が家だけど、カミサマが現れたな

んて話伝わってやしないのに、どうして俺が生きている間にそんな素っ頓狂なことが起こるんだ。

こんな非日常を喜べるほど、若くも青くも痛くもないんだもう！

「して、この娘の名は」

「ちよつと待て。なんでそんなにうちの娘にこだわるんだ。触るな。離れる。むしろ見るな！」

「あらあら。あなた、仮にもカミサマにそんなこと言っているの？」「カミサマだろうとなんだだろうと、うちの娘に近づくやつあ有害指定生物だ」

これは娘を持つ全父親の総意である。否定は許さない。

「その娘が我を眠りから引き上げた。深い深い眠りだ。あと数百年は眠り続けるつもりであったが、目を覚まさずにはいられなんだ。そんな存在を知りたいと思うのは当然である？」

「確かにうちの子は眠気も吹っ飛ばような可愛らしいことこの上ない赤ん坊だが、それとこれとは話が別だ。うちの子の視界に入りたというのなら、俺を認めさせてからにしてもらおう！」

まあどれだけ親ばかなのかしらこのひと。

奥さんが小さくつぶやいた言葉は黙殺です。

「我に向かつてそのような大言を吐いたものは久方ぶりだの。その言葉、その身が粉碎されてから後悔しても遅いがの？」

「粉碎て！ 言っとくけど、愛する妻と可愛い娘を遺して死ぬつもりはねえよ！？」

「お父さんが死んじゃうのは悲しいし困るわよねー？ ねー、翠^{スイ}ちゃん？」妻が娘を覗き込み、

ほんとに悲しいの？ほんとに困るの？と聞きたくなるような軽い口調で問いかける。

目の前に差し出された指をきゅっとなつかみ、娘　翠はほにゃっと表情をゆるめる。

「ほう、その娘の名は翠というのか。良き名だ」

そしてこのカミサマは抜け目ねえな！　奥さんが呼んだ名前を聞き逃さず、便乗して覗き込むな！

「翠よ。我が眠りを覚ました娘。これより、我が守護をそなたに与えよう。幾久しく、健やかに、幸多き生を歩むよう、我がそばで見守り続けるからの」

そう、片時も離れず、もっとも近いところでの。

やたら甘ったるい表情と声で言っただけ、娘を狙うカミサマという名の変質者に。

「　　誰がおのれなんぞウチの娘に近づけるかああああ！！」

娘を想う父の絶叫が響き渡ったのは、至極自然な成り行きであろう。

(後書き)

勢いによって初投稿。
お手柔らかにお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0229o/>

神様の庭

2011年10月6日16時54分発行